

## アラブ民族の生活・文化と中東問題

菊 地 弘 \*

中東は、1973年以降急速に関心をもたれるようになった。戦後、高度成長期までは、米国との外交が主軸で、他地域は従、例えば、外務省も、局ではなく部で、しかも、「中近東・アフリカ部」と、アフリカと一括した担当部署しか持っていなかった。それが、石油ショック以降、フセイン大統領のクウェート進行にいたるまで、日本において、多くの関心を集めることとなった。

ところで、アラブとは、何か、もともとアラブ民族は、アラビア半島中西部のネジド周辺を起源とする。それが、メジナのマホメット以来、イスラム教とともに拡大していく。ウマイヤ朝の時代にピレネー山脈を越えたのを始め、南はサハラのもーリタニア、北は中央アジア、東は、中国やフィリピンのミンダナオ島でも信仰されている。もちろん、その中には、ベルベル人など移民族も含まれているのだが、イスラム教がそこまで拡大したのは、異宗教に寛容であると同時に、改宗すれば人头税を免除するという政策をとったことも大きかった。また、イスラム教は、本来は安定的で秩序だった宗教であり、実戦的な面を持っている。イスラム教徒の日常の生活規範・道徳（フィクフ）には、神の啓示であるところのコーラン（クルアーン）に、ムハンマドの言行を記したハディースとがあり、これらは、イスラム教徒の進むべき道（シャリーア）とされている。更に、ハディースの補遺として、ムハンマドの親族の言行などを記したサハーバ（一致の意）があり、これらの3つが、イスラム法を構成するものであった。

今日アラブ連盟には、西からモロッコ・アルジェリア・モーリタニアなど20のイスラム諸国が加盟している。中東の示す範囲は、時代によって異なり一様ではないが、数次にわたる中東戦争は、アラブとイスラエル（ユダヤ民族）の闘いであった。1948年、イスラエル建国時のアラブ・イスラエル戦争に始まり、1956年のスエズ戦争、1967年の六日戦争と続き、1973年の第4次中東戦争を迎える。石油の埋蔵量が、世界の過半を占める中東には、先進国の利害も絡み、問題は複雑と化す。アラブ石油輸出国機構（OPEC）が、イスラエル支援国に対してとった、石油禁輸・輸出削減政策は、その年の冬から、“オイル・ショック”となって、日本にも波及するのである。（文責 MC廣田）

---

\* 財団法人アジア・アフリカ文化財団専務理事